

『文明論之概略』 結び

I. はじめに

福沢は、『文明論之概略』の冒頭で、論者が議論を展開する際には自分の議論の「本位」がどこにあるかを明確に定めることが必要不可欠であると、まず、クギをさしている。その上で、これから展開する自分の「文明」に関する議論の「本位」が、「西洋の文明を目的としている」ことを明確に提示して、読者に、今自分が提示した議論の本位に即して、わが議論の利害得失を論ずる事を求めたのである。

それでは、「西洋の文明を目的としている」という時、福沢は「西洋文明」の何を究極の目的としたのであろうか。その物質文明であらうか。そうではない。福沢は西洋の物質文明に関する限り日本もすぐに追いつけるとみていた。それではその経済的・法的・政治的制度であらうか。そうではない。福沢はさらにその先を見通していた。福沢が究極の目的としたのは、西洋のそのような諸制度を可能にする西洋の「精神的文明」である。別言すれば、そのような諸制度を可能にする「知徳：（特に知）」の発展である。しかも、一部エリートのものでなく、「衆人の知徳」の発展である。さらにいえば、福沢が究極に目指したのは「知徳の発展」のうえに成立する「独立自主」した人間の育成と「独立自主」した人間が交際する社会の実現であった。

しかし、福沢の「文明」をみる目は常に相対的である。文明は「野蛮の段階、半開の段階、文明の段階」と段階的に発展していくが、「西洋文明」といえども、日本やそれ以下の国に比べてはじめて「文明化」していると言えるのであって、いまの現状では、「西洋文明」といえども文明の究極に達しているとは到底いえない。ここに福沢の、文明の究極に出現するはずの、ユートピア思想が登場する。何千・何万年の未来には国家は消滅して、独立自主した人間像が相互に交際する「四海同胞」の世界が出現するはずであるというユートピア思想である。福沢はそこに文明の究極の目的を見ていたのである。

しかし、人類の文明発展の現状はどうもそこにまで至っていない。そのようなユートピアからほど遠い。今の世界の現状は国と国とが「物を売買って利を争い、事あれば武器をもって相殺する、商売と戦争の世の中」である。これが「福沢のリアリズム」を生む、福沢の現実認識である。そのような福沢の現実認識は「文明の究極の目的」を、直接的に目的とすることを許さない。福沢は人類の未だ至らない文明発展の現状を直視して、あらためて、福沢文明論の「本位」である「西洋の文明を目的とするという事」とはどういう事か、と問い直す。それが第十章のテーマである。したがって第十章は、福沢文明論の焦点であり、『文明論之概略』全体の結びの役割を果たしているのである。

II. 第十章「自国の独立を論ず」の大意

「文明」の究極の目的（「四海同胞のユートピア」）から見れば、西洋列強の脅威に対し自国の独立を謀るかを論ずるがごときは「文明論」のごく些細な一箇条にすぎないけれども、「我国の文明の度は今正に自国の独立に就いて心配するの地位にある」ということを

見落としてはならない。我国と世界の文明発展の度合を鑑みれば自国の独立を論ずることこそが「文明論」の火急のテーマなのだ。しかるに今の人民の現状を見るに、廃藩置県にいたる維新以来の諸改革を経て、人民は皆一安心し、「上下貴賤皆得意の色をなし」、「重荷を卸して正に休息している」状態にある。そこには自国の独立のためには私有をも生命をも擲とうという覚悟など何処にも見当たらない。

人民のそのような現状を見かねて、それを変革・教導し、もって、現実の困難に対処しようとする議論が湧き上がっている。その一つの議論にいわゆる「皇学者流の国体論」がある。彼らは人民安楽の「罪を忘古の二字に帰して、古に復せんとして、神世の古に証拠を求めて国体論なるものを唱え、この論を以て人心を維持せんことを企てている」。彼らは「王室」と人民との至蜜の交情と「王室」を慕う人民の至情がかの「王政一新」の原因であると捉え、その「交情」と「至情」の復権に今の人民の「人心一新」の拠点を見出している。しかし、鎌倉時代以来、700年もの長き間人民が「王室」を忘れその存在すら知らなかったことを思えば、いかにこの説が事実と離れ、事実在即していないかがわかる。「王制一新の原因は人民の覇府を厭うて王室を慕うに由るに非ず、唯当時の幕府の政を改めんとする人心に由て成りたるものなり」。このことだけから言っても、「皇学者流の国体論」は今の人心変革の具となすに足らないといわざるを得ない。

他方「耶蘇の宗教」をもって人類の大目的に導こうとする試みが行われている。これを「軽率なる妄説」ということは出来ないけれど、わが国の有様に就いて損得を論ずる場合には、余輩はこの説に同意することは出来ない。何故なら「耶蘇の宗教」は元来永遠無窮を目的となし、「一視同仁、四海兄弟」を直接の目的としているからだ。現状をみれば、それがいかに「結構人の議論」であるかがわかる。今は世界中が国を立て国と国とが相争っている時代なのだ。この国と国との「商売と戦争の世の中」にあっては、「一視同仁四海兄弟の大儀」と「報国尽忠建国独立の大儀」とは互いに相容れることが出来ないということを知らなければならない。「報国心」というのは一国に私する「偏頗心」である。「王道」から外れた「霸道」に立つものである。とはいえ、世界中の「政府（国）」を廃することができない限り、我々は「報国心」という「偏頗心」に従わざるを得ないのだ（資料1）。「四海兄弟」を目指す「耶蘇の教え」をもって一国の独立の基を立てるわけにはいかなのである。

以上のように、皇学者は国体論を洋学者は耶蘇教を漢学者は堯舜の道を主張しているけれども、どれもこれもわが国の独立を保つ上で「一功を奏する」ものとは言えない。そこで余輩が、以下、「独立のための方策」についての、唯一有効と思われる、平生の所見を述べることにしよう。

すべて事物を論ずる場合にはその事物の名と性質とを詳らかにする事から始めなければならない。いまわが国が直面している「困難事（病氣）」の名はなんと言うか。「余輩はこれを『外国交際』と名のるなり」。而してその病の性質は？「国命貴要の部分に犯したるこ疾というべし」。それでは「国の命にかかわる病」とは何か？以下この病の性質を「理財上」と「権義上」とからさらに詳しく掘り下げておこう。「理財上」の損得から見るならば、世界の富は

かならず上流（文明国）に集まり、世界の貧は悉く下流（未開国）に帰す、という一般法則が行われている。このままでは下流に位置する日本の富は上流に位置する西洋諸国に吸い上げられてしまうのは必定である。「権義の上」からみれば、「権義は同一なるべし」と条約では謳われているが、交際の実際には日本と西洋諸国との「不平均」は厭うべく、憎むべく、怒るべく、悲しむべき程大きいのだ。しかも今の外人の狡猾剽悍なるは公卿幕吏のそれとの比ではない。「その残酷の密なること恰も空気の流通をも許さざるが如くして、わが日本の人民はこれに窒息するに至るべし」（資料2）、（コメント1）。このように、わが国は「理財上」からみても「権義上」からみても、「命を奪われかねない病」に犯されているのである。それでは我々はその病に対しいかなる「療法」をもって立ち向かわなければならないというのであろうか。

ある学者は各国の交際は「天地の公道」に基くものであるから、「天地の公道」を頼みにして、「誠意を尽くしてその交誼を全うすべきなり、ごうも疑念をいさぐべからず」と論じている。たしかに「天地の公道」は固より慕うべきものである。しかし、西洋諸国は果たしてこの公道に従ってわが国に接するであろうか。そんな事は望むべくもないであろう。何故なら、世界中に国を立て、世界中に政府が存在する限り、各国は「天地の公道」ではなく「国益」という「私の情実」に従うのは必定であるからだ（コメント2）。世界中の「政府」を廃しない限り、各国は「報国心」という「偏頗心」に従って「国益」を優先させるのは必定であるからだ。国と国とが相争っている「商売と戦争の世」にあつて「天地の公道」を頼りにするというのは「迂闊も甚だしい、所謂結構人の議論」といわねばならない。

それではこの病に対処すべき有効な方策は何なのであろうか。ここでこの病に立ち向かわべき余輩の方策を示そう。それは次の一言に要約出来る。「云く、目的を定めて文明に進むの一事あるのみ」と。それではその目的とは何であるのか。「内外の区別を明らかにして我本国の独立を保つことなり」。ここで目的とは国の独立を保つ事なのだ。それではさらに国の独立を保つための手段は何なのか。「文明」以外にない。「この独立を保つのは文明の外に求むべからず」。我が国の独立を保つためには、日本人民を文明に進める以外ないのだ。「故に、国の独立は目的なり、国民の文明はこの目的に達するの術なり」（資料3）。

余輩の以上のような方策に対し、次のような反論が出てくるであろう。「人類の約束は唯自国の独立のみを以て目的と為すべからず、尚別に永遠高尚の極に眼を着すべし」と。この言たしかに正しい。「一国の独立」などという事は確かに細事にすぎないであろう。だが果たして現在の文明はその高遠までに達しているであろうか。達していない。達していない以上高遠を論ずることは許されない。「今の世界の有様に於て、国と国との交際には未だこの高遠の事を談ずべからず、若し之を談ずる者あれば之を迂闊空遠といわざるを得ず」。

国と国とが相争っている現状にあつては、まずは日本国と日本人民の存続こそ先決問題なのだ。それを果たして初めて「文明」の高遠・理想について語る事が出来る。国なく人なければこれが我が日本の文明だ、という事が出来ないではないか。余輩が理論の枠を狭めて単に自国の独立をもって文明の目的とした理由は以上にある（資料4）。これは、今の世界

の現状を察して日本の為を謀った火急の説であるから、文明の究極にある「文明」の「永遠微妙の奥蘊」からは外れたものである（コメント3）。だから学者たちよ、余輩の説に接して「文明の本旨」を誤解し、「文明」の「本来の面目」を辱めないようにしてもらいたい（資料5）。

今余輩は議論の枠を狭めて「国の独立」をもって「我が文明」と称した（狭義の文明）。しかし「国の独立」という「我が文明」は仮に「文明」の名をくださったまでのことで「文明の本旨」（広義の文明）ではない（コメント3）。まずは「国の独立」という「我が文明（狭義の文明）」を果たすことが火急の第一歩なのであり、それを果たして後の、他日、第二歩、第三歩と「文明の本旨（広義の文明）」に向かって行こうというのが、余輩の趣意なのである（コメント4）。

この事を前提として、議論の枠を限定した上での余輩の結論を言おう。「国の独立は即ち文明なり。文明に非ざれば独立は保つべからず」と。

III. 第十章のコメント

1. **福沢の西洋列強に対する脅威と怒り**：福沢は幕末三度の洋行（特に1861年12月から約1年にわたるヨーロッパ旅行）で西洋列強のペルシャ、印度、シャム、ルソン、ジャワ、なかんずくアメリカ「インヂアン」に対する非人道的仕打ちに触れ、世界列強に対する脅威とその世界的ヘゲモニーに対する怒りを経験した。ここは福沢の西洋列強ヘゲモニーに対する脅威と怒りの心情が直接的に吐露されているところである。「全身が慄然とし毛が立つ思いがするではないか」。私情に基づく「偏頗心」とは知りながらそれに仕へ、福沢が「自国の独立」をもって「文明の目的」とした（「狭義の文明」を採用した）のは、この西洋列強のヘゲモニーに抗してである。
2. **「天地の公道」と「国益」**：ルソー「政治理論」の究極の問題は「人類の一般意思（天地の公道）」と「ネーションの一般意思（国益）」との対立と調和の問題である。ルソーもまた「ネーションの一般意思」は「人類の一般意思」から見れば「偏頗心」であるが、まずはそれを優先させざるを得ないと考えた。その上で、ネーション同士の連合・結合によって「人類の一般意思」を実現していく事を志向している。その路線の中でEUが実現したと考えられる。EUは福沢が夢見た「四海同朋」のユートピアの第一歩なのかもしれない。
3. **「狭義の文明」と「広義の文明」**：福沢が「狭義の文明」を論じたのは「福沢のリアリズム」による。それ故それを「今の世界の現状を察して日本の為を謀った火急の説」であり、「文明の本旨ではない」と敢えてことわりをいれたのである。「福沢のリアリズム」に基づく「国益」優先論はともすれば「日本帝国主義の道を開いた福沢」の誤解をまね

きかねない。しかし、福沢が究極に目指したのは「文明の本旨」、その「永遠微妙の奥蘊」であることを見落とさなければ、つまり、福沢の「文明論」が「広義の文明論」に支えられた「狭義の文明論」である事を見落とさない限り、そのような誤解は生ずる筈がないのである。

4. **福沢文明論の趣意：**すでにキャッチ・アップを終えている我々の時代は、日本が列強の脅威に曝されていた福沢の時代とは異なる。「自国の独立」という火急の第一歩を果たした後の、他日、「文明の本旨」へ向かって第二步、第三步を踏み出すべき時代を迎えている。今や我々には福沢文明論の趣意に即して我々がどのような文明論を展開し、どのように文明を切り拓いていくかが問われている。

IV. 結び

福沢の「文明論」は「戦争（報国尽忠・建国独立の大義）」と「平和（一視同仁・四海兄弟の大義）」の緊張の中で展開されており、それを導く北極星は「独立自尊した人間像」である。「福沢のレアリズム」は直接的に「文明の本旨（天地の公道）」を目的とすることを許さなかったけれども、つまり、「商売と戦争の世」にあっては「報国心という偏頗心」に仕え、「国の独立」を文明の目的としなければならないと論じたけれども、その「文明論」は楽観論に貫かれている。福沢は「科学技術を使っての人間の自然支配」→「文明の進歩発展」は「商売と戦争の世」を経て、必ずや、「独立自尊」した人間像が織りなす「四海同朋」の社会が出現すると信じていた。だが果たして人類は「国益」を超え「ネイションの枠」を超える事が可能であろうか。経済のグローバル化が進んでいるとはいえ、我々の時代は未だ国家と国家が相争っている「商売と戦争の世」である事に変わりはない。

さらに我々の時代には「福沢文明論」の射程を超える問題が出現している。「科学技術を使っての人間の自然支配」→「文明の進歩発展」が生みだしている、「環境」と「人間」の汚染・破壊の問題である。（「人間の汚染・破壊」の最たるものは「心の病」）。

このような時代状況の中にあって、「独立自尊」した人間（「一部エリート」ではなく「衆人」）の育成とそれが織りなすソサイエティーの実現はいかにして可能か？我々の時代にあっては「福沢文明論」を継承する「我々の時代の文明論」が期待されているのである。